考古

木ノ上・高来（こうらい）山の横穴古墳

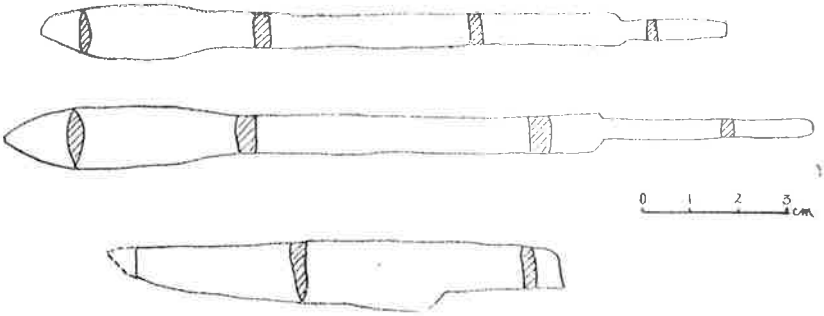
杉崎重臣

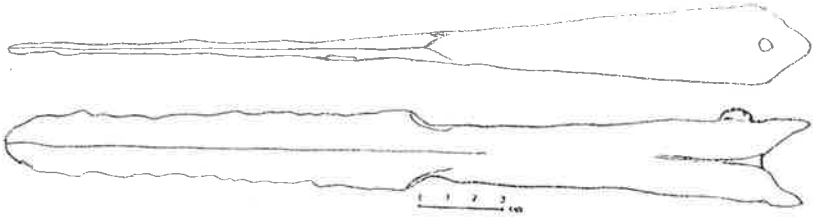
正月早々ながら、大分市教委からの連絡によつて、木ノ上（稙田）・上世利の北にあたる台上（約62m）で、伐木作業のときに発見されたという横穴古墳（一穴）の調査をすることとなつた。私たち富来隆・木許正夫両氏と同行三名、木ノ上の市支所に立寄り、現地の関係者とともに現場に至り、十時すぎから測図、夕刻に遺物をとりあげた。これまでも付近から多くの古墳群（円墳・横穴墳など）が発見・調査されているが、今回は伐木のために山頂から西斜面の山道をひろげる最中に見付けられた。今後ともなおつぎつぎと発見される可能性が多いところである。

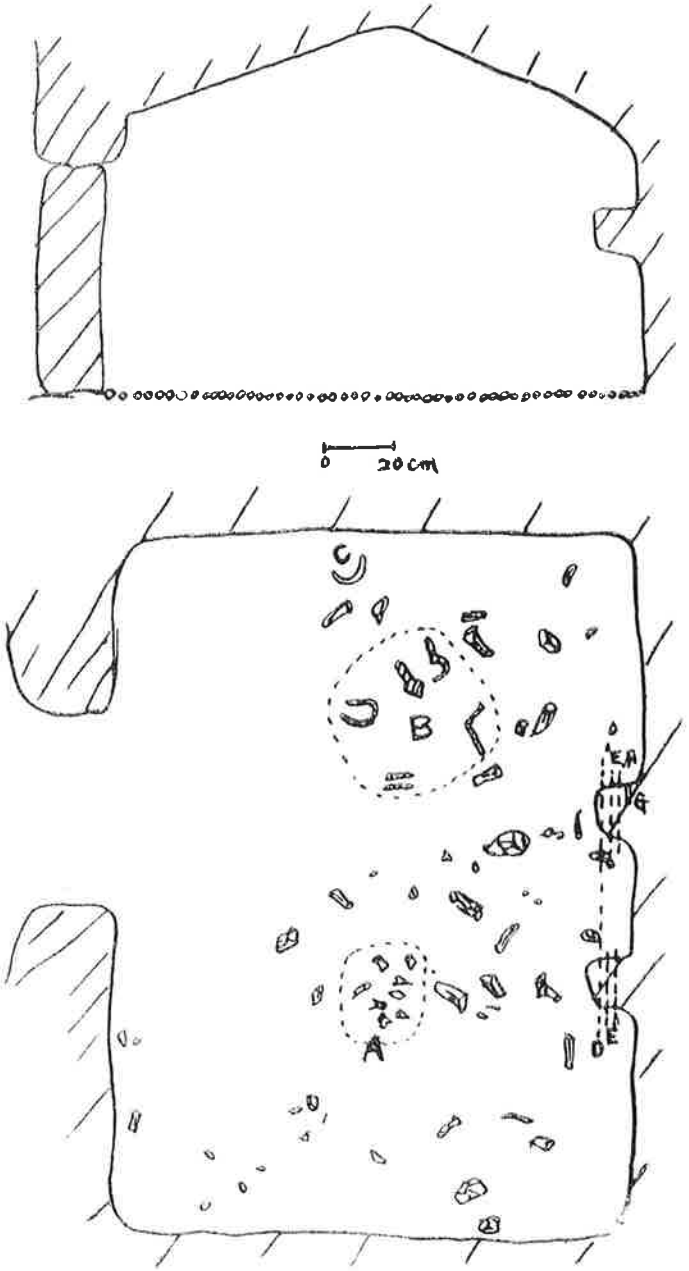
㈠　場所は大分川と支流の七瀬川とが合流しようとして雄城台（おぎだい）のため三角状に迂流するところの西南隅（雄城台のつけ根）にあたる、通称「高来山」（こうらいやま）とよばれる山頂の近くになる。横穴古墳から見ると、正面（西方）に大分川畔の田原部落を見下している。大分川の向う対岸は国分（国分寺址あり）である。この横穴古墳に行くには、いまの世利（せり）部落から山道を登つていくが、古墳からは世利部落は見えない。古墳から十数メートルで山頂にたつし、ここからは部落が見える。現地から東南麓にある世利部落は、七瀬川をへだてて高瀬部落に対するが、高瀬の加羅にも横穴古墳群が存する。

大分平野の西南隅に位し、古代の条里制あともこの付近までつづいており、そして高来（こうらい）山・加羅（から）などの地名（いま

（底部の礫石、その上に骨が見える）







遺物

A　歯

B　鉄製品

C　貝

D　鉄剣

E　鉄鏃

F　鉄鉾

G　銅鏡

その他骨片

小字名)が、横穴古墳群と直接的に結びつくかの感を抱かしめることは、今後の研究課題の一とされよう。これらの地は住居には適せず、墳丘ないし祭祀の場所に適すると思われるゆえに、なおさらのことである。大分平野を東南にこえて判田に至るがここは昔の判田郷のあとであり、土地の広狭・利用性とともに、判田と高来(こうらい)・加羅(から)との地名において、まことに対照の妙をしめしている。

古墳の築造、寺院の建立、採鉱・冶金、また農耕・土木など、各方面の技術を導入した帰化人たちであつたと思われるだけに、右のような地名がはたして彼らの活動とどのように結びついているものなのか、を探つてみたいと思う。

(二) ところで、調査にしたがつた横穴古墳は一穴だけであつたが、高来山の山頂ちかい西斜面にあり、入口の高さ〇・七m、巾〇・五mであつて、ほぼ長方形をなしている。入口の壁の厚さは〇・二m、地質はやわらかい凝灰岩質。玄室は図のごとく中央が高く、家型を示しており、正面の巾二m、奥行き一・四五m、側壁の高さ〇・八m、中央の高さ一・〇五m。正面の奥壁に刀剣などをかけるための「造り出し」が二個作られている(凸出の上部12cm、底部14cm、巾12cm、左右の造り出しの間隔は37cm。高さ40cmのところにつくられている。)

石室の内部には一面に砂利が敷きつめられ、壁面および砂利には「朱」(酸化鉄)のあとがしみ込んでいる。砂利の大きさは3〜5cmほどの川原の円礫で、その数量は約一万六千個、約百六十キログラムほどである。この横穴をほりあける労働力は現代の石工で約一週間を要しようという。

人骨は、正面(入口に向つて)に坐葬されたものかのように頭骨・四肢などが礫に混つていたが、はたしてどのように埋葬されたかは確証がない。歯骨の残存するものは、右上1・7、右下3・5・6、左上3、左下6・7、の八本であつた。右の遺骨からみて、五十才すぎの男子、一体分と考えられる。

遺物としては、前記の「造り出し」の上にのせられて副葬品があつた。すなわち、図にみるごとくである。鉄剣(双刃、長さ七十一cm、巾三・五cm、剣身中央部の厚さ〇・六cm)一振が左右の「造り出し」にかけて、向つて左に剣先きがあるようにおか

れていた。各々の造り出しでは、向つて左の「造り出し」の上に、鉄鉾（長さ29㎝、うち鋒部15㎝、柄部14㎝、）一本、鉄鏃（長さ17㎝のもの三本、14㎝のもの七本）計十本、刀子（長さ9㎝、先欠、巾一・五㎝）一本が重ねておかれ、それに小型・仿製のそまつなものながら銅鏡（径6㎝）一枚が正面の壁に立てかけられてあつた。右の「造り出し」上には鉄鏃（長17㎝のもの六本、14㎝のもの七本）計十三本、小刀（？破片）一本がおかれてあつたが、これらの鉾・鏃・刀子は左右のものとも中央に尖端を向けあつて置かれてあつた。

これらの遺物は室内の湿分のわりには保存状況がよくて、いずれも原型をそのままにとどめている。これは「造り出し」の上におかれてあつたからであろう。当地の横穴古墳としては、「造り出し」がなされて、それに副葬品が並べおかれているという点が珍らしい例であろう。刀や馬具の類がみられずに、剣、鉾の類が銅鏡とともに葬せられてあることからも、その年代は横穴古墳としては初期のうちに属するものではないであろうか。

山林の伐木・運搬のために山道をひろげようとして発見されたものであつても、じつは江戸時代中期にすでに一度開けられていたらしい。というのは、入口をおおつている蓋石が「朱」のぬられている面が裏側にされていたといわれ、かつそれに走り書きの線彫りで左のように記されていた。この蓋石は中ほどから上下にわれていた。しかしこのような状況にも拘わらず、室内は荒らされたようすが見受けられず、保存もわりあいに良好であつたのは、山頂に近い斜面に位置するゆえんかとも思われる。幸いにして、発見されたままの状況で、直ちに調査することが出来た。関係者の各位に、御厚意を深謝したい。（大分市金池小敎諭）

元禄十年
豊後国 木上村
卯月十日

――一九六四、一、一〇――